

左利きと、差別の定義。

sanukisoba

「左利きは差別されている」

こうした発言を目にしたとき、恐らく9割以上の人はそんなことはないという反応を返すでしょう。もしかしたら、何人かの人はそんなことはないと言いつつじゃあ具体的にどういうところが差別だと思うのかと尋ねてくるかもしれません。そうしたら

- ・ 左利きというだけで「親のしつけが良くなかったんだね」と言われることがある
- ・ 急須やレードルなどの道具類が非常に使いづらいのに配慮を考慮されたことがない
- ・ 駅の自動改札機や自動販売機等が極めて使いづらいのに配慮を考慮されたことがない

などという現状を伝えてみましょう。それでもやはり9割以上の人がそんなの差別ではないという反応を示すでしょう。

そして結構な割合で「そんなに不便だと思うなら右利きに矯正すればいいじゃん」という回答をいただけるでしょう。

右利きの方に非常に多いのですが、左利きの人に対して「なんで矯正しないの？」と当たり前のように尋ねる人がいます。そして彼らの中では右利きに矯正すればいいのに矯正しないんだから多少不便な思いは仕方ないでしょうという感覚が秘められているパターンも多々あります。

ここでひとつ明確にしておきたいのですが、左利きを右利きに矯正するというのはあまり簡単な話ではありません。吃音になってしまうというデータが示されることもあるくらいストレスフルな行為であって、決して容易な行為ではないのです。さらに言うなれば「何故矯正しないの」と尋ねてきた人に対して「じゃあ左利きが不便に思うタイミングを理解するために左利きに矯正してみてよ」というと「そんなの無理に決まってるじゃない」という回答がしばしば。これはなかなか面白い話であって、右利きが左利きに矯正するのはあり得ない話だが左利きは右利きに矯正すべきだという考えの方は決して少なくないのです。最近でこそ左利きのまま育てるという家庭が増えたようですが、今でも左利き＝悪という認識の下で矯正を当然視する人は一定数存在します。また、左利きについてはどうやら先天性らしいという研究結果が一部にあることも付け加えておきます。

では、ここで

「矯正しないんだから多少不便な思いは仕方ない」

という考え方について少し検討してみたいと思います。

この考え方というのは平たく述べてしまえば、世の中のほとんどのものは右利き用に作られているんだから左利きでは使いづらいのは当然で矯正しなければ不便なのは当たり前というお話になります。少なくともこのように解釈しなければ「矯正しないんだから多少不便な思いは仕方ない」という考え方を論理的に自立させるのは難しいです。

では、なぜ世の中のほとんどのものは右利き用に作られているのでしょうか。

それは世の中の大半の人間が右利きだからです。

なぜ世の中の大半の人間が右利きだとほとんどのものが右利き用に作られるかというその背景まで考えるとそれは効率性と合理性の問題に行き着きます。皆さんがお買い物をするときと同じ理屈です。

例えばコーヒーマーカーを持っている人が「エスプレッソメーカー」を買おうかと悩んだとします。そのような場合ほとんどの皆さんが「エスプレッソメーカーを果たしてどれくらい使うのか」ということを一つの材料として検討するはずです。そこで既存のコーヒーマーカーとエスプレッソメーカーの使用頻度を予想して、頻度が高ければコストをかける価値があり、頻度が低ければコストをかける価値はない、そのように使用頻度を一つの要素としてエスプレッソメーカーの購入を判断するはずです。

それと同じことがここでは生じていて、世の中の9割ほどを占める右利きの人間に対してプロダクトを製産し、公共物については右利きの人間を対象とした設計にした方が合理的で効率的で、コストを回収できるのです。最大多数の最大幸福という考え方に近いかもしれません。その判断過程においては、多数派ではない左利きの人間が不便に思うことは多少止む無しという結論がくだされています。いや、そもそもターゲットとしている右利き以外の利便性など考慮に値する要素ではないのです。それは是非の問題ではなく、判断の基準が合理性と効率性によって設定されている場合における事実の問題です。

すると「矯正しない以上は多少不便な思いは仕方ない」という考え方は「左利きには多少不便だが止む無し」というプロダクトの製産・設計段階での判断を一步前進させたものと言えます。どこら辺が一步前進させているかという「矯正しない以上は」というひと言をもって左利きを個人の責任論にすり替えている点です。

左利きからの矯正が難しいという話は既にしてありますが、そうした事実を知ってか知らずか、矯正しない以上そのコストは負いなさいね、という考え方がここに見て取れます。果たしてこれは妥当なののでしょうか。

例えば、右足の膝から先が先天的にない人を考えてみましょう。その人は義足に馴染むことができず車いすを利用していたとします。そしてある日車椅子での移動が日本の公道においては如何に困難を伴うかということを語ったとき「義足にしないんだから仕方ないでしょ」という反応をすることは果たして妥当なののでしょうか。

ここでようやくこの文章の意図を明らかにしたいのですが、私はこの文章を通して「左利きが差別されている」と言いたいわけではないのです。あくまでも「差別って何だ」という根源的な

話をここでしてみたいのです。なのでこの話は理屈と論理という極めて退屈な観点から眺めていただけると幸いです。

話を戻しましょう。

車いすを使う人に義足の不使用を理由として不便は仕方ないと主張することは是か非か。

これは判断の別れるところだと思います。ただ、この主張に対しては2つの疑問を投げかけることができます。

- 1.その考え方はアクセシビリティ（日本で言うところのバリアフリー）の概念に反しないか
- 2.義足と車いすというのは生活様式や環境、障害の程度や嗜好といった複数の背景から決定されるものだと思うが、その選択肢のいずれかを選ぶことは許されないのか

1の点についてはここでは触れません。これは行政的・工学的観点から検討すべき課題です。

そこで、2について。現代の社会においては自己同一性の保持はQOLの重要な一要素として積極的に認めましょうという方向で社会が動いていることに異を唱える人は少ないと思います。その人らしさや、その人らしい生き方の追求を否定することは現在の社会においては「望ましくないこと」とされています。そしてその恩恵を蒙っている人はとても多いはずで、この文章を読んでいる人にも。

義足か車椅子かを選べる状態・立場にあるケースを考えたとき、その選択肢を否定することはこの観点から考えた場合どうなのでしょう。障害を抱えているが故にそもそもの選択肢が不便な思いをするかどうかの2択となってしまうことは妥当なのでしょう。

もう一度、話を左利きの話に戻しましょう。

世の中は右利きにあわせて構成されているのだから左利きは不便な思いをするか矯正するかの2択である。

この考え方は妥当なのでしょう。

妥当とするのならその根拠はなんなのでしょう。

「少数派だから仕方ない」という回答が一つ考えられます。

前述した通り、合理性効率性の観点から見た事実としては少数派が不便を強いられる現実は存在するでしょう。ただしそれを妥当だと判断するのはまったく別の話です。

合理性や効率性の観点からすると少数派に合わせた考え方をとるのは難しい→事実（社会的事実
と言い換えても可）

合理性や効率性の観点からすると少数派に合わせた考え方をとるのは難しい「従って少数派の不
便は仕方ない」→判断

つまり、ある事実を仕方ないとするかどうかはあくまで恣意的な判断であるという視点を欠落
させないでいただきたいということです。それを踏まえた上で左利きの話題。

少数派だから仕方ないということを選択肢を限定する根拠とするのであれば、必然的に少数派
の不便はすべて是認されることとなります。左利きは全体の1割ほどの比率で存在するといわれて
います（1977年の統計によれば8%~15%というの是有名）。1割を少数派とするかどうかという
議論はさておき、ここでは少数派だということにしましょう。すると厚生労働省の障害者白書（
平成17年度版）において国民の5%が障害をもっているというデータからは、障害を抱えた人は左
利き以上の少数派であり、少数派だから仕方ないというロジックからすれば障害を持った人の不
便は仕方ないという結論が導き出されます。ですが世の中はそうは動いていませんね。障害のあ
る人には配慮をしなければ差別である、という方向で動いています。しかしそれより遥かに多い
はずの左利きが数の論理で不便を強いられる社会はロジックからすれば明らかに差別に他ならな
いのですが、仕方ないと。これはどうしたことでしょう。

敢えて整理してみましょう。「少数派だから仕方がない」ということであれば数が少なければ
少ないほど「仕方ない」という一言で処理される可能性が高くなります。すると、差別ではない
、少数派だから仕方ないと言われる左利きよりもさらに数が少ない障害者については仕方ない
という一言で処理される可能性がより一層高くなるはずですが、しかし、実際には障害者を少数はだ
から仕方ないという一言で処理するのは差別とされ、左利きを少数派だから仕方ないの一言で処
理するのは妥当だと思われるのが一般的です。

「ある程度の基準を超えた極少数」については保護することとなるのでしょうか。するとその
基準は恣意的なものとなってしまいうでしょう。

もう一度問うてみますが、果たして私たちは何をもって差別とし、何をもって差別でないとし
ているのでしょうか。障害者と左利きという対比で考えれば少なくとも単純な数の問題ではなさ
そうです。

2つ目に考えられる回答は「たいした不便ではないし、矯正も難しくないので選択肢が限定され
ても問題ではない」とするもの。

矯正が難しくないという点は誤解であると先に述べているのでここでは触れません。

たいした不便ではないというのは少し引っかけられます。そのたいした不便かどうかは誰が決め
るのでしょうか。少なくとも左利きの人間が不便を訴えたところで大した不便ではないとしてい

る以上、その判断は左利き以外の人間、数の関係で言えば多数派の立場が行っているはずで

す。現状に異を唱え改善を要求しても、改善を行うよう頼まれた立場によってその必要性を否定される。これはどうでしょう。

もし「車椅子で公共交通機関を使うのはまだまだ不便があるから改善してほしい」と主張する人に対して「それは大した不便ではない」などと言おうものならこの社会では大問題です。そのような回答をした人は差別者として非難されこそすれ合理性と効率性の鑑だなどとは言われな

いでしょう。でも、左利きに対してはその回答が成立しそうです。

なぜある局面においては不便等の判断をする行為が差別となり、ある局面においては差別とならないのでしょうか。

果たして差別とは一体なんなのでしょう。差別と認定されるものについてはある思考・行為が差別となり、差別と認定されていないものについては同じ思考・行為であっても差別とはならない。そういうものなのでしょう。社会なりなんなりにおいて差別と認定されたとき初めて「お前のその不利益・不便は差別なので救済されてしかるべき」という話になるのでしょうか。その構造自体が極めて差別的と言える余地はないのでしょうか。

あなたにとって、差別とはなんでしょう？

それを踏まえた上で今一度差別というものに向き合っていただきたいのです。

ここから先は私の考えていることです。そんなもん読みたくはないよという人は読み飛ばすなりなんなりしてください。私が一番行いたかった「差別とはなんですか」という問題提起は前段でひと段落です。

日本社会において差別というのは見て見ぬふりをされがちなもの、忌み嫌うべきものという扱いを受けていて、差別というものに対しては「けしからん」と反射的に回答し、しかし一方で差別というものからは目をそらしたがつている傾向があるように思います。そして、私たちは差別とは何かという根源的な問いかけを考えることもないまま、差別は良くないと呪文のように答えているだけのように思えます。

今までに「差別とは何か」を考えたことはあるのでしょうか？

恐らく、差別はよくないというのは学校教育や保護者から教わったことでしょう。

そのとき、どのように習ったでしょう。

「これは差別だよ。差別は良くないね。だからこれはダメだよ」

という三段論法の教育だったのではないのでしょうか。いや、そうではなく差別とは何かということから丁寧に学んだよという人はどれだけいるのでしょうか。

恐らく、現実的な問題として差別の定義をするのは想像を絶する困難を抱えた行為であり、かつそれを教育するということはもはや無謀と呼ぶにふさわしい行為なのだと思います。まさか「差別とは何かを論ぜよ」なんて初等中等教育の段階で行えとも思えません。

じゃあ大人は差別とは何かをわかっているべきかと問われると、それもまた違うように思います。

こうして文章を書いている私自身、差別とは何か良くわかっていません。わかっているからこういう文章を書いたのではなく、実はこの「差別とは何か」をわからないにもかかわらずわかったつもりになって差別者になっている人が多いんじゃないのかなとあるとき気付いたからこうしてひとつ、頭の体操として文章を書いてみました。

私の中で「区別」と「差別」の間には明確な違いが存在します。前者は事象に対する客観的な評価であり受動的な概念です。一方で後者は事象に対する主観的な働きかけであり能動的な概念です。しかしこれはあくまでも相対的に定義付けを試みたときの私が考えた上での話であって、「差別とは何か」という絶対的な定義はさっぱりわかりません。

差別はダメだ！とは誰もが言えることです。これは暗記モノと同じで、これとこれは差別で、差別はダメですというあたかも「大化の改新より平安京の時代の方が後です」といった程度のお話です。そこには思考の欠片も存在しません。したがって、新たな暗記項目、例えば「今後は〇〇も差別です」といった項目を与えられない限り、潜在的に存在している差別的な構造や差別そのものに気付くことはあり得ないことなのです。礼儀されたものについて差別だと認識するような程度の社会であれば、誰かが差別と定義しない限り、そこに差別性を見出すことなどあるはずがないのです。そして、定義するのは誰なのかというのが問題となります。

しかし、歴史的に鑑みても、私たちが本来気付くべきは、その「差別として把握されていない差別性」です。私たちが現在差別として認識している物事のほとんどは、差別と見なされるまで長い間「これは差別ではない」という扱いを受けていました。黒人差別しかり、障害者差別しかり。あるときそれらが差別であるというストリームが一般化した時点からその潜在的な差別性が認識されて差別として扱われるようになったのです。

言い換えれば「これは差別である」という認定を受けなかったとしたら今もなお黒人差別や障害者差別が差別ではなく合理的で効率的な判断の一つと思われていた可能性があったということです。私たちが社会に転がっている差別性に気付かなければ、非常に残念なことに差別性は差別性を認められず、差別と定義されず、差別と定義されなければ保護も忌避も存在しないのです。

したがって、私たちは本当に差別を廃することを望むのであれば自分たちで差別性を見つけていかなければならないのです。

話が延々とループしそうなのでこの辺でやめておきますが、つまるところ差別というのは主観的な判断に依存して生きながらえているのではないかと思うのです。何を正当とし何を不当とするか。これは主観的判断です。じゃあ、その主観的判断が一般的な判断だと誤解してしまうことがないようにどう気をつければいいかを考えたら結局のところそれって、他人の不平不満に真摯に耳を傾けるという一手間が必要なんじゃないでしょうか。

最後に一つだけ言っておくと、あなたが差別の例として知っている事象は、差別と認識されているだけまだ救いがあるんですよ、ということです。語弊のある言い方かもしれませんが。